手動の

ペンギン鳥たちの ためのブルース

平居 謙

私ならば 手動のペンギン鳥がよいと思う

なぜならそいつは いつも笑ってるだろ?

誰だって何だっていつも笑い続けているのは難しいましてやペンギン鳥は飛ぶことすらもあんまり上手にできないのだものほんとは笑うどころじゃないのにね

それでも私はよいと思う

ついでにいえば 原宿にいるのがよいと思う 原宿にいるのは愉快だからね

小さな楽器とか手に持っていて 楽しそうに弾いてるでしょう? あれがいいね

ハーフ?クゥオーター? のんのん!ホールだよ、ホール 「ケーキはまるごと僕のもの 君もまるごと僕のもの」って歌うみたいに

ペンギン鳥はやはり 手動のものにしてほしいと思っている 委細、よろしく

明日から世界は気持ちよく晴れが続くよ

彼(つまり左の文中における「私」)はある夏の蒸し暑い 夜、突然この世界から旅立っていった。あたかも本人その ものが「手動のペンギン鳥」であったかのように。死んだ あと得体のしれないものばかりが転がっている彼の部屋 に、1つのサッカーボールが転がっていた。白いペンタゴ ンの部分が何枚か、皮を剥されていた。そしてそこに油性 の太いペンで、指示書のようなものが書かれていた。しか しそれば指示書というにはあまりにも抒情的なおかつ暗 示的に過ぎるために我々は、それが詩であると判定する に至った。謹んでここに報告申し上げる次第である。